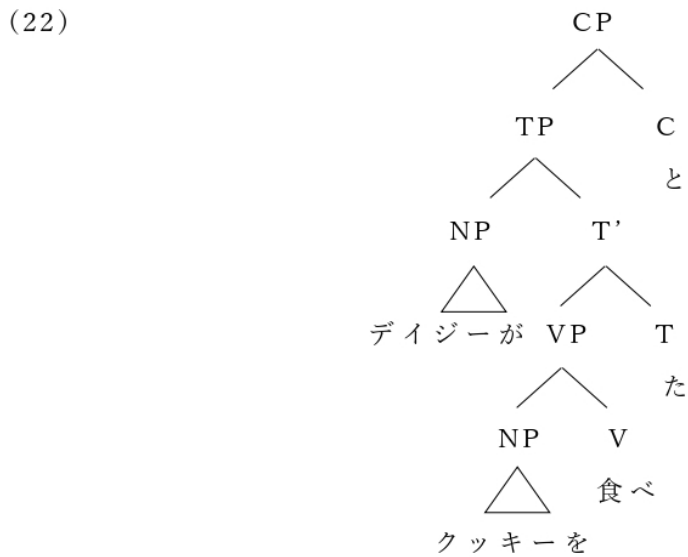
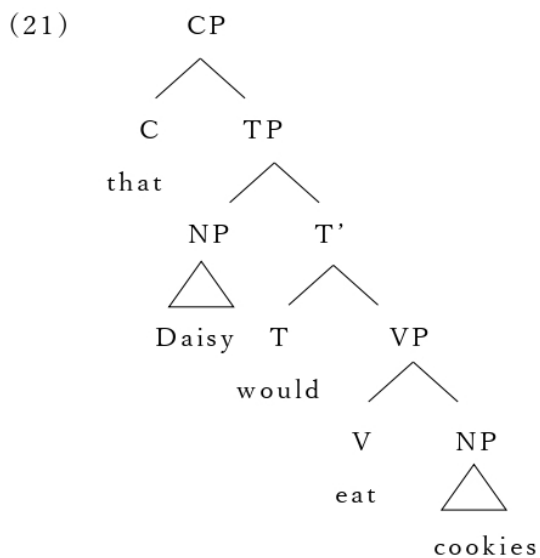


## 第5章 文とは：統語論1 (小町将之・瀧田健介)

### <基本問題>

1. 英語の(21)と日本語の(22)の例文について、従属節部分の構造を樹形図に書き表して、英語と日本語の語順の相違が、どのように反映されるか確かめてみなさい。

### (解答例)

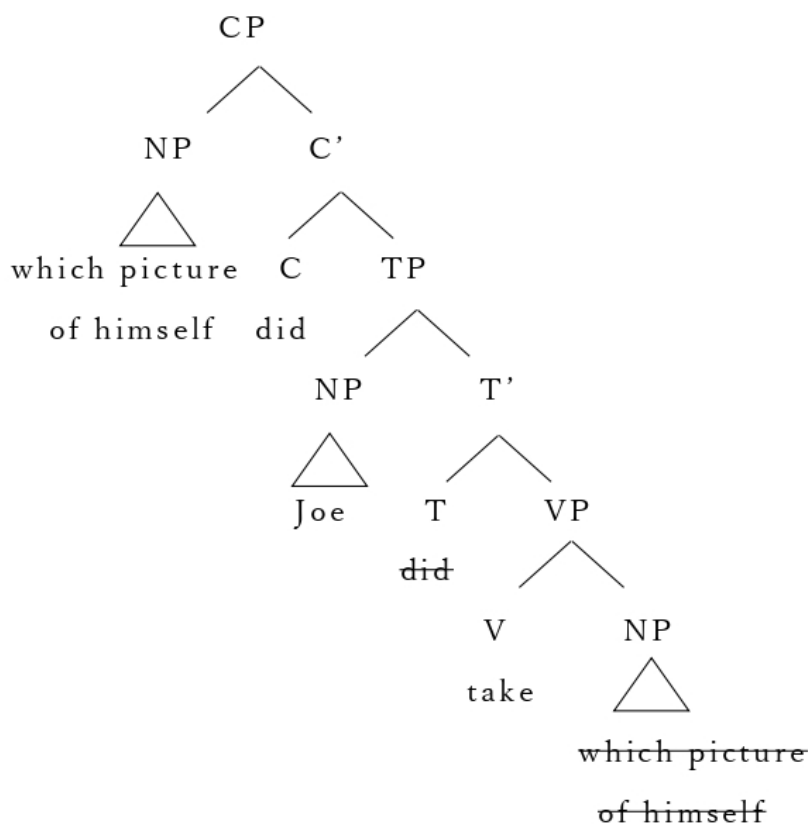


2. 再帰代名詞の束縛条件(30)が英語でも成立するか、i)の例を分析しながら考えてみなさい。

i) Which picture of himself did Joe take?

(解答例)

i')



構造を樹形図で示すと i') の通りになる (T から C への移動も簡潔に表記したが、助動詞 do の分析については第 13 章 207 ページも参照)。CP 指定部で発音される wh 句に含まれる再帰代名詞 himself は、文中の Joe と同一指示関係に基づく解釈をもつが、明らかに先行詞 Joe に c 統御されておらず、束縛条件(30)を満たしているとは言えない。しかし、この wh 句が移動の元位置である V の補部にもコピーを残すと考えると、ここにも himself が含まれる。VP 内の himself は Joe に c 統御されており、束縛条件(30)を満たす。このことから、移動する要素に再帰代名詞が含まれる場合、ひとつのコピーが束縛条件を満たしていれば先行詞と再帰代名詞の同一指示解釈が可能だと仮定することで、束縛条件(30)を維持できる。このため、束縛条件(30)は英語でも成立すると考えられる。

<発展問題>

1. 構造的あいまい性の具体例を、日本語で考えてみなさい。また、その文の句構造を実際に分析してみなさい。

(解答例) たとえば、i)のような文を考えてみよう。

i) マイクでシンジが歌ったとカオルが宣言した。

この文において、手段を表す修飾語「マイクで」は、カオルが宣言するために使った道具であるという解釈(解釈1)と、シンジが歌うのに使った道具であるという解釈(解釈2)が考えられる。これは、「マイクで」が主節に含まれると分析するか、従属節に含まれると分析するかによって構造的に区別することができる。

解釈1 [主節 マイクで [従属節 シンジが歌ったと]]カオルが宣言した。

解釈2 [主節 [従属節 マイクでシンジが歌ったと]]カオルが宣言した。

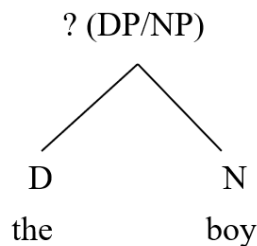
2. 内心性の原理(8)と X'の原理(16)に基づいて、名詞句と動詞句の内部構造を分析してみなさい。その際にどのような問題が生じるかを明確にして、可能であれば、解決方法も探ってみなさい。

(解答例) 以下では、英語の例を用いてこの問題について考えてみる。

(I) 名詞句について：

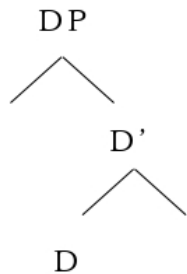
たとえば the boy という語列には、限定詞 (determiner: D) の the と名詞(N)の boy が含まれている。この D と N のみで構成される名詞句の構造を考えてみよう。

i)

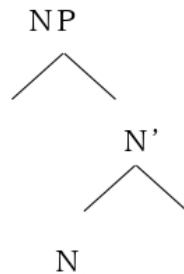


内心性の原理(8)に従えば、i)の構成素構造全体の統語範疇は、DP となるのか NP となるのか、いずれの可能性もあり得る。X'の原理(16)によると、D も N もそれぞれ主要部として句を形成するので、D は ii)のような DP を、N は iii)のような NP をそれぞれ形成することになる。しかし、i)に示すように、この枝分かれ構造の節点の統語範疇として DP と NP を両立させることはできない。

ii)



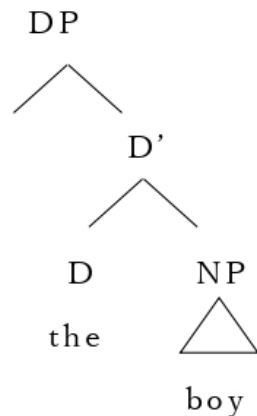
iii)



名詞句構造を ii)のように DP だと考えると、N は DP の指定部か補部に位置することになるが、指定部であっても補部であっても、その位置を占める構成素は X'の原理(16)では句なので、N がどちらの位置を占めたとしても、X'の原理(16)に抵触してしまう。また、名詞句構造を iii)のように NP だと考えると、今度は D の方が NP の指定部か補部に位置することになるが、ii)について考えたのと同じように X'の原理(16)に抵触してしまう。

そこで、内心性の原理(8)と X'の原理(16)に従って、ii)の DP と iii)の NP のうち、一方が他方の補部、あるいは指定部になる可能性を探ってみる。D<sup>^</sup>N という語順は、iv)に示すように D の補部の位置を NP が占めると考えると適切に捉えられる。

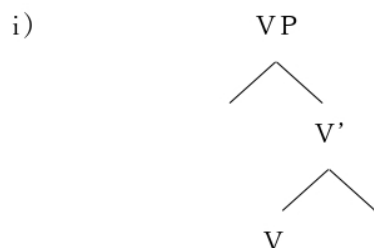
iv)



iv)のように名詞句構造を分析する考え方は、DP 仮説として知られている。DP の指定部は、どういう構成素が占めるのだろうか。興味のある読者は、まず Abney (1987) を参照してみよう。DP 仮説については、コラム 4 も参照。

(II) 動詞句について：

X'の原理(16)に従えば、VP は i)のような構造をしている。第5章では、VP の指定部の位置に何らかの構成素が来るような例は取り上げなかった。

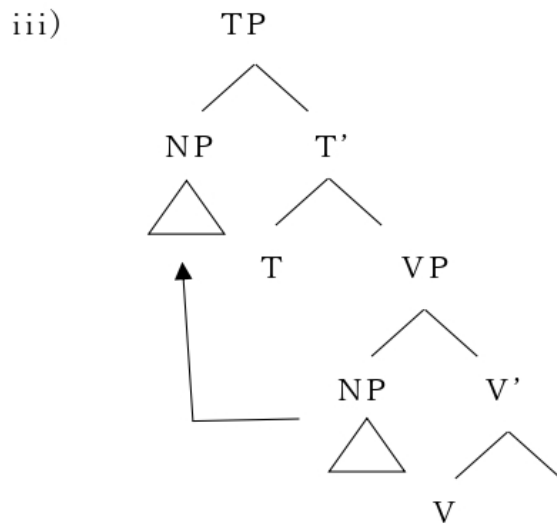


英語では動詞を修飾する副詞は、iia-c)の対比が示すように、語の配列において、VP を構成する動詞と目的語のまとまりの前後に現れることはできるが、動詞と目的語の間に現れることはできない。VP の先端に現れる副詞はVP の指定部の位置を占めていると言えるのだろうか。

- ii) a. Tim will [<sub>VP</sub> harshly criticize Bill].  
b. \*Tim will [<sub>VP</sub> criticize harshly Bill].  
c. Tim will [<sub>VP</sub> criticize Bill harshly].

2 節では、iic)のような VP の末端に現れる動詞を修飾する副詞表現は、動詞と目的語名詞句で形成される VP とまとまって (7) のようにより大きな VP 形成することをみた。動詞を修飾する副詞が iia)のように VP の先端に現れていても、動詞との関係は iic)と同様である。指定部の位置を占めると考えると、同じ関係を異なる階層構造で捉えることになってしまう。iia)のように VP の先端に現れている副詞は VP の指定部の位置を占めているのではなくて、iic)と同様により大きな VP を形成している (本章 74 ページを参照)。動詞句と名詞句の内部構造及び付加詞が結合する位置については第 12 章 5 節も参照)。

VP 指定部を占める要素はあるのだろうか。第5章では主語 NP は TP の指定部に位置すると説明したが、樹形図 iii)に示すように、主語 NP はまず VP の指定部位置に外的併合され、そこからさらに TP の指定部位置に移動し (内的併合され)、その位置で発音されると考えることはできないだろうか。そのように考えると VP の指定部位置には主語 NP のコピーがあることになる。この考え方は、動詞句内主語仮説として知られている (Fukui and Speas (1986), Kitagawa (1994), Koopman & Sportiche (1991), Kuroda (1988))。



この考え方では、「誰が何を V する」「誰が誰に何を V する」などといった動詞の項構造に関する意味的な情報が VP 内で捉えられ、内項は VP の補部位置に、外項は VP の指定部位置に外的併合されることになる。動詞の項構造については第 7 章 111 ページ及び第 11 章 179 ページを、動詞句内主語仮説については第 8 章の 120 ページを参照。

<参考文献>

- Abney, S. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Fukui, N., and M. Speas (1986) "Specifiers and Projection," *Papers in Theoretical Linguistics: MIT Working Papers in Linguistics 8*, 128-172.
- Kitagawa, Y. (1994) *Subjects in Japanese and English*, Garland Publishing.
- Koopman, H., and D. Sportiche (1991) "The Position of Subjects," *Lingua* 85, 211-258.
- Kuroda, S.-Y. (1988) "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese," *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.